
異世界混沌平凡譚

榊原 鞘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界混沌平凡譚

【Nコード】

N6851V

【作者名】

榊原 鞆

【あらすじ】

死んだ筈の男は生きていた。

ただ起きた男のいた場所はただ広い草原のど真ん中。

何故生きているのか、何故こんなところにいるのか、何もわからないまま男は叫ぶ。

そこから始まるほのぼのとした、一人の男の一つの村の村人としての一生を描いたファンタジーの世界での物語り。

始めましての方は始めまして。

お久しぶりの方はお久しぶりです。

以前アルカディアのチラシの裏で搭載させていただいていた物語をリニューアルしながら再掲載しようと思います。

作者の名前が少し変わりましたが、同一作者の作品なのでお願いいたします。

中身は色々と大幅に変わっている部分もありますので、以前一度読んでいただいた方でも、もう一度読んでいただくと凄く嬉しく思います。

アルカディアでは完結させている作品なので、此方でも完結させられるように頑張ります。

アルファポリスにも参加させていただく予定です、是非よろしければご協力いただけると助かります。

最後に、ご意見とご感想大いにお待ちしております。

表現方法、言葉等、こうした方がよい、これは可笑しいと思うものがありましたら是非ご指摘していただけると、よりいっそう面白いと思っただけの物語が作れると思いますので、よろしければお願いいたします。

プロローグ〜死んだ筈の後の世界〜（前書き）

ほのぼのとした、一人の男の村人としての一生の物語なので、たまにまったりしたい、のんびりした物が見たいと思われる方は是非一度読んでみてください。

後、アルカディアでも散々言われていたのですが、プロローグの話が残念だと、その話しなんですが、作者も一生懸命考えながら変えたりしたつもりです。

それでもやはり可笑しいと思われたなら、また色々完結した後に変えさせていただきます。

楽しんでいただけると嬉しいです、どうぞよろしくお願いします。

プロローグ　死んだ筈の後の世界

【死んだ筈の後の世界】

良い風が頬を撫でる感覚で俺は目を覚ました。

「んうゝ良く寝た」

自分でそんな事を呟いた後「あれ？」と思った。

俺は何時寝たんだった？

俺は寝てたのに何故外にいるんだ？

突然思い至ったのはそんな疑問。

先ず何時寝たか、否、俺は寝て等いない、いない筈だから先ず此処から既に可笑しい。

一先ずそれは置いて置こう、次に何故外にいるのか。
外にいるのは俺が屋上に出たからだろう。

それは良い、ならば何故屋上にいる筈の俺がこんな平原のど真ん中にいるのか？

解らない。

結論。

意味不明。

「って、本当にどう言う事だよこれ」

叫んでしまいたくなっただが、余りにも解らない事だらけで叫ぶ元気も無かった。

そんな状態になっただけでもしょうがないだろう？

意味も解らず寝てもいないのにいつの間にか寝ていて気付けば平原のど真ん中。

悪戯にしたって度が過ぎている。

呆然としながら周りの風景を見つめ「どうしたら良いんだ」と、呟きながら改めて最後に記憶の合った時の事を思い出す。

そう確か、俺の最後の記憶に残っているのは、俺が屋上に行つて煙草を吹かしている時だった筈だ。

俺は溜息と同時に煙草の煙を吐き出した。

何故溜息等付いているかと言うと、職場の同僚が俺を妬んで嫌がらせをして来たからだ。

それだけなら何時もの事なので流して終わりだったのだが、今回はそれに同僚と一緒に争っていた案件で、同僚の嫌がらせを受けながらも全く何の問題も無く、先にかなり良い結果を出してしまい、それに癪癢を起こした同僚が矢鱈滅多に周りに当たり散らしているからだ。

もう一度俺は溜息を吐いた。

上手くないかない。

ああ、本当に上手くないものだ。

別に仲良くしたいとは思わない、むしろ絶対に仲良く等なりたくない。

だが、それでも仲が悪くなりたくない訳でもない。

何とか今の現状はどうにか改善出来ないものか、そんな事を考えていたらいきなり背中が熱くなって力が入らなくなった。

意味が解らず倒れたまま辛うじて動く首を動かす。

先ず目に入って来たのは何かの柄とその付近から流れ出る真っ赤な液体。

何なのか解らなかったそれは、少しの時間が経つにつれて、自分の血液だと言う事に思い至った。

俺の、血？

中々上手く回らない頭で何とかそんな思いを浮かび上がらせる。

そんな事をぼんやりと考えているといきなり可笑しな、明らかに狂っているとは思えない嗤い声が聞こえてきた。

「ふひっ！ ふひひひひっ！ し、死んだ！ しんだしんだしんだああ！？ この僕を、この僕を馬鹿にしつづけたこの屑野郎がとうとう死にやがったあ！ 僕が殺したんだ僕は強いんだあ！」

その声を聞いてやっと理解した。

俺は此奴に刺されたのだと。

さっき見えた柄はナイフの柄だったのか。

俺はそいつにぼんやりとした視線を向けながら其処まで俺が憎かったのかとだけ考えていた。

特別憎いとか、殺してやりたいとか何も考えられなかった。

ただ純粹に人に此処まで憎まれるのは初めてだ、案外嫌な物だな

あと感じるだけだった。

不思議と痛みを感じない。

刺された瞬間熱いと思っただけで、それ以外何も感じない。

それは今の俺にとって幸いだった。

何故なら誰だって痛み何て感じたくは無いだろう？

俺は馬鹿の様に、狂った様に嗤い、俺を罵倒する声だけを聞きながらだんだん意識が朦朧として来た。

此のまま死ぬのか。

俺はそう考えて、それならそれでしょうがないかと思った。

人生を振り返っても余り特徴的な事も悔いに残るような事も何もない。

遺言を残すような家族も居なければ、本気で悲しんでくれるような親しい友人等も居ない。

ああ、何だ。

俺、別に此处で死んでも何の問題無いのか。

俺はその事に不思議な心地良さを感じながら、とうとう意識が無くなり、死んでしまった筈だった。

「ああそうか、俺は死んだのか。……じゃあ何で生きてんだ

？」

改めて碌でも無いなあと思いながら思い返して漸く其処に思い至った。

死んだと思っただが生きていたのか？

いや、そんな筈は無い、少し確認してみたが刺された後すらない

のだから。

ならばあれこそ夢だったのか？

それも違うだろう、確かに刺された後のあの熱さは現実的だった。そんな事しばらく考えていたが、幾ら考えても解らない。

解らない俺は、段々と混乱し、パニック状態になっていく頭を落ち着ける為に思いつき叫んだ。

「此処は何処で、どうなってんだよおおおおお！？」

俺の叫びは何も無い草原にただ木霊する事無く消え去っていった。

第一話〈会話と言う名の奇跡〉（前書き）

第一話です。

話の内容はほぼ変わらず、微妙な表現方法を変えました。

話の内容は変わらずとも、追加で話を加えましたので、長さ的には倍、とまでは行かないまでも一・五倍程度の長さにはなっている筈です。

前に読んでいただいた方でも改めて読んでいただける様にといい、頑張ってみました。

是非読んでいただけると嬉しいです。

第一話　会話と言つ名の奇跡

【会話と言つ名の奇跡】

月日が流れるのは早い物だ。

俺が混乱し、雄叫びを上げたあの日から早一ヶ月。

俺は今小さな村で一人の村人として暮らしていた。

多分村人として扱われていると思いたい。

何故こんなにも自信が無いか、それは偏に是が理由だ。

「
× ? × 「

因みに此の言葉は今俺を面倒見てくれている綺麗な女性が発した言葉だ。

うん、全く解らないのだ。

だが、だがしかし！

何時までも解らないままの俺じゃない！

此の一ヶ月、コツコツと必死こいて、今までに無い程頑張つて勉強したんだ。

此の綺麗な女性に絵本を見せてもらったり、教会見たいな建物の

神父らしき人に絵本を貰ったりして何とか頑張ってきたんだよ。

未だ普通の速さでの言葉は聞き取れない物の、単語、単語で所々微妙にだが解る気がする場所もある。

だからこそ、片言だが、今の俺なら少しは会話が出来る様になっている！

筈なのだ。

通じるといいなあ。

そう心の底から願いながら俺は言葉を話す。

「こ、とば、つじて、ます、か、？」

通じたか！？

俺は固唾を飲んで目の前の女性を見詰める。

是で通じていればゆっくりと話してさえもらえればきっと聞き取る事だつて出来る筈何だ！

どうにか通じていてくれ！

そう思い、女性を見つめると次の瞬間女性は酷く驚いたような表情をしながら焦ったように早口で話し始めて、俺が肩を落としたのを見てから、今度はゆっくりと話しかけて来てくれた。

「っ！

！？っあ、っ、ごめんなさい、これくらいな

ら、解る？」

俺の願いは天に通じた！

否、俺の努力が実を結んだのだ！

やったぜ、やってやったぜ俺！

偉いぜ俺！

凄いぜ俺！

俺は一人酷く感動しながら自分自身を褒め称えた。

そんな俺にもう一度ゆつくりと同じ言葉を綺麗な女性が言ってくれているのに気づいて慌てて返事をする。

「はい、わ、かり、ます。しらな、い、ことば、たくさん、ごめんな、さい」

ゆつくりで拙い話し方ながら、それでも言葉を続ける。

未だ一番言いたい一言が言えていないからだ。

綺麗な女性が嬉しそうに俺を見てくれているのを見詰めながら俺はその一事を發した。

「あ、りがと、う」

俺はこの感謝の一言をこの村の皆に言いたかったのだ。

だからこそ必死に言葉を覺えた。

こんな身分不詳で怪しさ爆裂の俺で言葉さえ通じないというのに面倒を見てくれた村のみんなへの精一杯の感謝の気持ち。

俺はそれを込めてその一言を發したつもりだ。

違う言葉であればもう少し前に何となく解り、話せたかも知れなかった。

でも俺は最初に話すならばこの言葉を覺えて、この言葉を伝えられるようになってからと決めていた為、一ヶ月も掛かってしまったのだ。

実際この言葉を漸く理解できたのは二日程前だ。

それから何とか話せるようになるまで二日掛かった、長かった、長かったがこれで漸く一步前進だ。

俺は良く解らないがきつとこれからこの世界で生きて行かないといけない。

なら俺は恐らくこの村で生きて行く事になるだろう。

その為にはもつとしつかりと話せるように早く言葉くらい覚えちまわないといけないだろう。

そんな事を考えている間にいつの間にか綺麗な女性が居なくなっていた。

あれ？

一体どうしたんだ？

何て事を考えていると、多数の足音がドタドタと俺の方に向かってくる音が聞こえてきた。

一人の村人が姿を現したと思ったら、次々と人が増え、俺が知ってる限りの殆どの村人が俺の目の前に勢揃いした。

その沢山の村人は口早に言葉を紡ぎ俺に話かけてくる。

ああ、何と云うか、本気ですんません。

言葉が早すぎて本気で何言ってるか解りません。

と、俺が落ち込んだのを見た綺麗な女性が他の村人たちに怒りながら俺に向き直って「ごめんなさい」と言ってきた。

俺は相変わらず拙い言葉遣いだが、それでもしつかり「気に、しない、で」と返した。

次の瞬間周りの村人たちから歓声が上がリ、俺は非常に驚いてしまった。

綺麗な女性はそれを見て苦笑を洩らしながらも、やはり嬉しそうだった。

暫くして歓声が収まると、綺麗な女性がどうしてこんな事になっているかを話してくれた。

何と驚く事にこんな事になっているのは俺が話せるようになった

かららしい。

村の皆、大体三十人前後だが、この皆はそれを凄く喜んで、此処に来てくれたらしい。

言葉を上手く聞き取れない俺に、辛抱強く何度も何度も同じ説明をしてくれる。

此処に来た村人の皆は今まで不安そうにしていた俺を見ていて心配してしてくれたと言う。

そしてとうとう言葉を話せるようになって、これで少しは不安も無くなり、安心出来る様になるんじゃないかと思ってくれているらしいのだ。

俺はその事を理解すると同時に涙ぐんでしまった。

最初は耳を疑った。

だが、綺麗な女性は俺が聞こえていないと勘違いをして何度も何度も同じように説明してくれる。

俺の為に。

そう、皆が皆俺の為に心配し集まり喜んでくれている。

それを理解して俺は思わず泣いてしまった。

今まで、この世界に来る前だつてこれ程俺の事を心配したり、何かの事で喜んでくれたりした人は居なかった。

ボロボロと我慢できず泣いてしまった。

畜生！

良い年した男だつてのに情けない。

それでも是は無理だ、我慢何て出来る訳が無い。

でも、それでもこの一言だけ言っておかないと。

「あ、りが、とう！」

泣きながら、それでも俺の精一杯の気持ちを込めて村人全員に向

けてそう言った。

こうして、村に来てから一ヶ月。

漸く村の一員になれた瞬間だった。

思い返せば此処に来てからの一ヶ月大変だったが苦しくは無かった。

それも全てこの村の人達の御蔭だ。

俺が混乱した頭を落ち着ける為に、思いっきり叫んでみると、幸いな事に近くにあったこの村の人が俺を見つけてくれた。

そう今俺の事を面倒見てくれている綺麗な女性だ。

俺はとりあえずその瞬間見惚れたね。

驚くほど綺麗な女性だったからだ。

薄い茶色の髪を背中下まで伸ばしたストレートの長髪に、優しげなトロンとした感じの瞳。

身長は低く百五十の半はあるかどうか位だが、出る処は確りと出ており、引つ込む処は引つ込んでいる。

顔立ちは少し幼い印象を与えるが、俺は綺麗だと思った。

今、良く良く考えて見ると綺麗と言うよりも可愛いと言った感じなのだが、その時の俺はそう思っていた。

そんな感じでこの綺麗な女性とファーストコンタクトを取ったのは良かったのだが、その綺麗な女性に話しかけられて違う意味で固まった。

何故か、そんなの決まっているだろう。

言葉が通じなかったからだ。

最初聞き取れないだけかと思い、もう一度話かけてくるのを待ってみたがやはり全然言葉が通じない。

綺麗な女性が何度も話し掛けて来てくれるが俺は首を傾げるばかり。

俺も話しかけるが、綺麗な女性もまた不思議そうに、困ったように首を傾げるだけ。

お互い困ったように見つめ合った後、俺は身振り手振りで何とか伝えようと頑張ったが、良く考えて見てくれ、こんな摩訶不思議な現象をどうやってたら身振り手振り何かで説明が出来る？

出来る訳が無い、と言うよりも普通に言葉が通じて話しを出来たとしても通じないかも知れないんだからな。

だけどそんな俺の一所懸命な姿が見を結んだ。

伝わらず落ち込んだ様に肩を落とした俺に、綺麗な女性は恐らく俺を迷子か何かと思ったんだろうな、俺の肩を叩いてにっこりと微笑んでくれた。

正直何で微笑んで貰えたのか、どう言う意図や意味があったのか何て解らない。

それでも救われたね。

思わずその笑顔を見て漸く俺は少しだけ落ち着く事が出来た。

気持ちを立て直っていくのが自分でも解った。

本当に不思議だけどその時の俺は本気で目の前の綺麗な女性の、その笑顔だけで救われたんだ。

その後は、俺が少しだけでも元気になったのが解ったのか俺の手を取って村まで連れて来てくれた。

村に着いた俺を綺麗な女性は少し大きな、その綺麗な女性の家だと思われる場所に連れ、部屋の中に入れてくれるとベッドを指差した。

俺は何となく寝て良いと言う意味だろうと思ったが、はつきりと解らない為どうするか迷っていると、その綺麗な女性は優しく俺をベッドに横になるように身振りで示してくれた。

それを見て漸くやっぱりベッドを貸してくれるんだと言う事が解り、頭を下げた。

綺麗な女性は少し恥ずかしそうに笑ったかと思うと手を振りながらベッドをまた指さした。

照れた表情が一段と綺麗だと思った俺はもう末期かもしれない。そんな事を考えながらベッドに横になると、自分の予想以上に疲れていたらしく直ぐに眠りにつけた。

次の日起きると、綺麗な女性が俺に御飯を作って持ってきてくれている所だった。

それからが凄かった、代わる代わる色々な人が俺を見に来たのだ。珍しいから、それも合ったのだろうがそれ以上に皆が皆心配そうに俺を見て、元気付ける様に笑いながら俺の肩を叩いて行った。

何人かの村の人は食べ物や飲み物等を持って来てくれたりもして、凄く嬉しかった。

それから三日程何もせずその家にお世話になっっていたんだが、良い年した男が何もせず女性の世話になっただけではいけない、そう思い先ずは言葉を伝える方法を考えようと思った。

その前に力仕事でも何でも手伝えることがあるなら喜んで手伝うが、言葉が通じなければ上手く手伝う事も出来ないんじゃないかと俺は思った。

先ず何か役に立つ道具が無いかと、俺は自分自身の持ち物を調べてみる事にした。

と言っても持ってるのは財布だけだった。

煙草は恐らく倒れた時にライターと一緒に落ちてしまったのだらう。

俺は財布の中身を確認して見る。

中には札が数枚と小銭が少々。

明らかに心許無い金額だったが、其処まで考えて俺は苦笑を洩らした。

この世界で前の世界のお金が使えぬ訳が無い。

俺は苦笑を洩らしながらお金を財布にしまった。

どうしよう、そう考えてふと窓の外に子供達が絵本を読んでいる

姿が見えた。

微笑ましい光景だなあと思いながらその瞬間閃いた。

絵本！

そう、絵本であれば書いてある絵と文字を照らし合わせれば読めるようになるかもしれない。

読めるようにさえなれば、それを見ながら言葉を話せるようになる筈だ。

其処まで考えて俺は落ち込んだ。

金も無い、何も無い処か信用だつて無い筈の俺がどうすれば絵本を手に入れられるんだと思いつたからだ。

溜息を吐きながら、落ち込んでいてもしょうが無い、取り合えず村に何か無いか、何とか出来ないかを見て回つて見ようと思った。

初めて外に出るので少し緊張したが、この歳で何時までもそんな事をやっては居られない、こうして俺は一步外に踏み出した。

一步踏み出してしまえば案外何とかなる物で、俺は村の中を言葉は通じないが動作は通じるらしく頭を下げたりしながら歩いて行く。

途中お店らしい場所を何度か見てみたが何処にも本らしき物は売っていなかった。

誤算だった。

予想以上にこの村では本と言う物が流通してないらしい。

先程持っていた子供も余程運よく手に入れた代物だったのだろう。道理で沢山の子供が群がってはしゃいでいた訳だ。

俺はどうしたものかと考えながら歩いていると、村人達が入れ替わり立ち替わり入っていく建物が有る事に気付き、何だろうと気になった。

その建物はとても大きく、村の中では一番の大きさだと思われる建物だった。

そして何か雰囲気も違う。

お城を小さくした様なデザインの建物で、一番高い処には鐘まで付いている。

俺が居た世界で俗に言う教会という建物に酷似していた。
恐る恐るその中を覗き込んで見る。

そんな俺に村人が後ろから肩を叩いて来た。

酷く驚いて俺が振りかえると、腹を抱えて笑いながら俺の手を取って教会らしき建物の中に入って行った。

普通に入って問題無いんだ。

そう思い、村人から手を放して貰い、建物の中を歩いて行く。

幾ら見てもやっぱり教会にしか見えなかった。

中の造りも、壁の奥の方にあるステンドグラスみたいな絵の書かれたガラスも、奥まった場所、一段高くなった場所にいる人物の着ている服装と雰囲気も全部が全部そうとしか思えない物だった。

その人が着ているのは良く教会の司祭とかが来ている法衣と呼ばれる衣装で、少し動き辛そうだった。

呆然と教会の中を見ていると、その法衣を着た神父様らしき人が俺を手招いた。

俺は素直にそれに応じて近付いて行く。

近付くと俺は手を取られ、一つの部屋に案内された。

其処には俺が探し求めていた物があった。

神父様らしき人は、文字が読めず言葉が話せない俺に気を使ってくれたのだろう。

絵なら問題ないだろうと思ってか絵本を手渡してくれたのだ。

俺はパラパラとページを捲り中を見て見る。

絵と言葉が解りやすく載っているものでこれなら何とかなるかも知れない。

俺が嬉しそうにパツと顔を上げると、神父様らしき人は俺に微笑みながらこの絵本を俺に上げると言った仕草をしてくれた。

貸してあげるとかそんな意味かもしれないが、取り合えず帰って帰って良いような感じの事を身振りで示してくれた。

凄く嬉しくて、どうにかして感謝を伝えられないかと考えて、俺は財布の存在を思い出した。

確かに此のお金は这个世界では使えないだろう、それでも銅とか鉄とかアルミなら少しでも価値はある筈だ。

俺は感謝の気持ちをお金で表すのは気が引けたが、それしか今の俺に出来る事が無いので、財布の中身を全て神父様に渡した。

驚いた神父様は首を振ってそれを俺に返して来ようとしたが俺もそれだけは頑なに拒否した。

頑固な俺に苦笑を洩らした神父様はお金を半分に分け、これだけなら受け取りますと言った仕草をして残りの半分を俺に無理やり握らせた。

俺はもう一度深く頭を下げた。

精一杯の気持ちを込めて深く。

神父様はそれを見て微笑んでくれた。

俺は最後伝わらないと解っていても「ありがとうございます！」と言いながら教会らしき場所を後にして、お世話になっている家に戻った。

戻った俺を見て綺麗な女性が慌てて近寄ってきた。

次の瞬間安心したように息を吐き出して、少しだけ涙を携えながら怒りだした。

心配してくれたんだ。

俺は怒られていると言うのに心が凄く温かくなってきた。

嬉しい、本当に嬉しい。

思わず笑みを浮かべてしまっていたのだろう、綺麗な女性は何か唸るとそっぽを向いてしまった。

しまったと思った俺は必死に身振り手振りで謝り倒す。

暫く必死にそんな行動をしていると、それが可笑しかったのだろう、綺麗な女性は噴き出すように笑いだした。

俺はそれを見て怒るより先ず良かったと思った。

笑っている綺麗な女性は一段と綺麗に見えたからだ。

それから俺はお世話になったお礼の気持ちで神父様らしき人に渡したのと同じようにお金をその綺麗な女性に渡した。

実際問題はがお礼になるかどうかなんて解らない、それでも俺に出来る精一杯の気持ち。

受け取るうとしない綺麗な女性に無理やりそれを握らせて部屋に戻る。

途中で恥ずかしくなってしまったのだ。

普通ならそうでもない事だが、俺はそう言った事をした事が無かった。

この村に来てから初めてで、綺麗な女性に示したのが二度目。

それに気付いた瞬間急に恥ずかしくなってしまった。

お金を最後受け取ってくれた綺麗な女性が優しい笑みを浮かべていた。

きつと俺の顔が赤くなっていた事に気付いたからだろう。

それがまた恥ずかしい。

それでも気分はかなり良い物だ。

俺はそんな気分になり、それから村をちよくちよく出歩きながら絵本で言葉の勉強をして過ごす日々が続いた。

そしてとうとう最初の言葉を話す日が来たのだった。

振り返ってみてもこの村の人達の温かさをとて感じる事が出来る。

俺は心の底から思った、この村に来て幸せだと。

それから半年が経った。

俺は普通に言葉を話し、会話が出来るようになったし、文字を書いたりする事も出来るようになった。

そしてとうとう知ってしまった。

ハッキリとしてしまったのだ。

半場自分でも認めていたのでやはりとしか言い様が無いがそれでも酷く驚いた。

そう、此処が、この世界が俺が居た世界じゃないと言う事が。

「綺麗な女性Side」

何時ものようにモンスターに気をつけながら、村の周辺に生えている薬草を摘みに行っている時だった。

突然大きな叫び声が聞こえてきたのだ。

急な叫び声に私は驚いてしまい、尻餅をついてしまった後、慌てて起き上がると周りを確認した。

モンスターが来たのか！

そう思ったからだ。

だけど、実際その叫び声が聞こえた後、周りには一切のモンスターは見受けられなかった。

モンスターがいないと解り、少し落ち着いてから先程の叫び声の思い返してみると、モンスターの叫びというよりも人の叫び声の様に聞こえた。

もしかしたら、私はそう思ってその叫び声が聞こえた方に慎重に歩いていった。

少し歩くと、その叫び声を上げたと思われる人が、草原の真ん中にぼつりと座り込んで呆然としていた。

どうしたんだろう？

この周辺には私達の村しかない。

いや、人が住める環境の場所が私達の住んでいる村しかないと言った方が良いかな？

ということはある人は冒険者？

でも、あの服装はどう見ても冒険者と言うよりも普通の村人の様な格好だ。

呆然としたまま動かないその人が少し心配になって私は思わず近づいて声を掛けていた。

無用心かもしれないが、この辺りにまで早々変な人は来ないだろう。

こんな辺境の外れも外れのこの場所なんかに。

私が声を掛けると驚いたようにその人は振り返った。

その人は男性だった。

私よりもかなり身長が高く、多分百八十センチはありそうだった。黒い短髪の髪に、少し切れ長で釣り上がり気味の瞳。

顔立ちは少し尖った形に見えるが、それがまた整っている顔立ちを引き立たせていた。

体格も村の人達みたいにながちりしているわけでもなく、かと言ってひょろいに行った訳ではない。

振り向いた彼に見つめられた瞬間私は少し頬が熱くなるのを感じた。

顔立ちがかなり格好良いと言うのもあったのだろうが、それ以上にその人の私を見る目が凄く真っ直ぐで照れくさかったと言うのもある。

私は驚いているその人にもう一度話しかけた。

私がもう一度話しかけてもその人は首を傾げるだけで困った様な表情になっている。

どうしたんだろう？

そう思いもう一度声を掛けるが、やはり困ったように首を傾げる

だけだ。

その後、その人も話しかけてくれたのだが、困った事に言葉が解らない。

今まで全くと言って良い程聞いた覚えの無い言葉だった。

その後もしばらく二人で言葉が何とか通じない物かと話していたが、どうしても言葉は通じなかった。

その人は言葉が通じないと解ると、身振り手振りで一生懸命に私に何かを伝えようとしてくれていた。

それでもやはり解らない。

二人揃って困った様な表情で固まっていたが、そろそろ日も暮れ、モンスター達が活発に動き始める時間だ。

此処にいるのは危ない。

私はそう思いその人の手を掴むと、村の方を指差し引いて歩き出した。

その人は何となく付いてきて欲しいと言う事を理解してくれたのだろう、素直に私について来てくれた。

村に着いて、少しすると案の定空は綺麗なオレンジ色になり、段々暗くなっていっていた。

危なかった。

私はそう思いつつ家に戻った。

とりあえずこの人、結構疲れてるっぽいよね？

目の下にクマも出来てるし、さっきから微妙に身体の動きも可笑しい気がする。

そう思った私は、客室に案内するとベッドを指差して寝て下さいと言った。

やはり言葉は通じないが、何となくベッドを指差している事から理解はしてくれていると思う。

ただ本当に正しいのかどうかを判断しきれていない様だった。

だから私は、その人にもう一度ベッドを指差した後、手を枕に見立てて寝る格好を試してみた。

やってみた後に自分の姿を思い浮かべて恥ずかしくなったが、それでもその人はそれで理解してくれたらしく、素直にベッドに横になってくれた。

その後は直ぐに、数分もしない内にその人はスースーと言う寝息を立て始めた。

よっぽど疲れていたんだ。

私はそう思いながら静かにその部屋を後にした。

とりあえず、しばらくは私の家で面倒をみようかな？

何だが悪い人には見えないし。

こうして、私と彼の長い長い同居生活が始まったのだった。

その後、言葉が通じないまま一ヶ月くらい経った。

何時もと同じ様にその人を起こしに部屋に入ると、その人は既に起きており、何やら真剣な表情で私を見つめてくる。

どうしたんだろう？

私も少し緊張しながらどうしたのかと言う手振りと言葉を話す。やっぱり言葉は通じてないが、手振りは何となく通じる様になってきた。

もう少しすればもつと通じる様になるだろう。

その事に少し嬉しくなりながら、彼を見つめていたが、次の瞬間彼が口を開いて、私たちの言葉を話した。

驚いた。

驚きすぎて思考が止まる程驚いた。

私が我に返り、彼に視線を向けると非常に落ち込んだ姿の彼の姿があった。

言葉が通じなかったと思っているのだろう。

私は慌てて話しかけるが、彼は物凄く申し訳なさそうに私を見つ

める。

ああ、慌てるな私、彼は漸く言葉が話せる様になつたばかりだ、こんな早口だと解らないだろう。

改めて私がゆつくりと話しかけると、彼は今まで見た中で一番の笑顔を浮かべて喜んでいた。

その姿を見て私も何だかとても嬉しくなつた。

その後、彼は私を真つ直ぐに見つめて「ありがとう」その感謝の言葉を送ってくれた。

その一言に、その一言に込められた思いがとても暖かくて、私は気づけば部屋を飛び出して村の皆に叫びまわっていた。

それから直ぐに私の家に村の皆が押し寄せた。

仕事でどうしても抜けられない何人か以外全員が来た。

この一ヶ月程度で彼はこれだけの村の人達と関係を築いていたんだ。

言葉も通じないのに、凄い。

私は改めてそう思つて、口早に彼に話しかける村人をしかりつける。

そんな口早に話しかけても解る訳がないでしょ！と。

その後私が改めてゆつくりと話しかける。

理解し切れていない単語があつたりするのだろう、時々動きが固まつたりするので、ゆつくりと何度も同じ言葉を話しかける。

何度か話しかけていると彼は急に涙ぐんだ。

私は何か意味を間違えて捉えられたのか！

そう焦つてしまい、あたふたともう一度ゆつくりと同じ言葉を話す。

その後、彼から出た一言で間違えて捉えたんじゃない事は解つた。その後は凄かった。

村の人達は自分達の家から色んな食べ物や酒を持ち込んで、彼と一緒に騒ぎ始めたのだ。

未だに言葉は余り通じ合っていないようだが、気持ちを通じ合っている。

そう、先程の彼の一言と涙でそれは村の皆全員が感じている事だった。

今までと同じ村の人と言う思いはあったが、それでもどこか微妙な距離感があったりしたが、この瞬間彼は、完全にこの村の一員になったのだった。

第二話　此処は異世界？（前書き）

第二話になります。

色々と加筆修正を行っておりますので、依然読まれた事がある人でもかなり違う印象を受けられると思います。

読みやすいようにと思い書き進めていますが、上手くいっているかは判断できません。

出来る限り頑張っていきますのでよろしくお願いします。

第二話　此処は異世界？

【此処は異世界？】

言葉と文字を理解出来るようになってから半年が経った。

そして此処が、今まで俺がいた世界とは全く別の世界であると言う事が解ってしまった。

言葉は通じず、文字すら見た事も無い文字、その上建物や動物達も見た事の無い様な物が多々あるのだ、何となくそんな可能性もある、そう考えてはいたが実際に解ると何とも不思議な気分だった。

因みにこの世界ナインデイルと言うらしい。

九つの大陸がある世界であり、一つ一つの大陸は船を使わないと行き来が出来ないらしい。

そしてその世界の一番東の辺境の中の辺境と言う場所にあるのがこの村だと言う事だ。

何故此処がはつきりと今まで俺がいた世界と違つたと解ったかは、言葉、文字等以外にも色々理由がある。

先ずは先程考えていた通り言葉と文字だ。

聞いた事も見たことも無い文字、これだけならば未だ俺の勉強不足という場合もある。

建物や動物に関しても俺の勉強不足で済ませる事が出来る。

色々俺がいた世界の地名等を聞いたり、此方の地名等を聞き、此処の地名等が全く解らないのは俺の勉強不足、俺がいた世界の地名が解らないのは此処がそれだけ辺境にあるからだと無理やり納得も出来る。

納得しがたいが、この世界にはモンスターと呼ばれる化け物がいる。

これも、これも無理やりこじつければ辺境で突然変異を起こした動物達の姿かもしれないと誤魔化せた。

いや、正直この時点でもうかなりありえないと思っていたんだが、それ以上に信じられない物があり、それを見せられた結果もう完璧に信じるしかなかったのだ。

それは何か、色々詳しい説明があつたが、解り易く言うとならGに出てくる様なレベルがあると言う事だ。

世界の話からモンスターの話を聞いている時に、レベル幾つ位になればそのモンスターを倒したりする事も出来る様になる、等と言った話が出たので判明した事だ。

モンスターがいる、そう言われただけでかなり危険な世界で命の危機を感じ落ち込んでいたというのにその話を聞いてますます落ち込んだ。

俺が落ち込んだせいで一旦話しが中断されたが、少し休憩がてらお茶を飲んだりしている内に少しずつ落ち着いていったので、そのレベルと言われてる物がどう言う物を聞いてみた。

話を聞いたただと実際どう言う物なのか余り良く解らなかつたので、実際にそのレベルがどう言う風になっているのかを見せてもらった。

見せてもらった相手は俺がお世話になっている綺麗な女性だ。

言葉を話せる様になってから直ぐにお互い自己紹介を済ませたので彼女の名前もしっかり解っている。

レイス。

これが彼女の名前だ。

この世界、一部の貴族や王族と言った偉い人達以外は普通に名前以外はないらしい。

だからこそ最初自己紹介をした時、俺が名乗った時は勘違いをされたりもした。

直ぐに誤解は解けたのだが、一瞬にしてレイスの反応が硬くなっていたので焦ったものだ。

そして、見せて貰った物は半透明の下敷き見たいな物だった。

その半透明の下敷き見たいな物はいきなり目の前に現れた。

まずその時点驚いてしまい、大いに笑われたりもした。

その後落ち着いてから改めてそれを見せて貰い、見せてもらったそれには名前とレベル、職業が刻まれていた。

名 前：レイス

職 業：村人

レベル：5

またも驚きながらそれを見てみると、レイスは笑いながらそこに表示されているのは簡単なステータスで、本格的な様々な種類のステータスもあるが、それは基本的に相手に見せたりしない物なので隠してあると言っていた。

そしてレベル自体はその隠されているステータスが一定以上に上

がれば上がるものらしい。

その隠されたステータスは基本的に色々な方法で上げる事が出来ると言う。

簡単な説明だったが、大まかに毎日筋トレ等をしていればSTRやVITと言う筋力や体力が上がり、走り回ったりしていればAGIやVITと言う敏捷性等が上がる。

針仕事や細かい作業をしていればDEXと言われる器用性が上がり、頭を使う作業、勉強等をしていればINTと言われる頭の良さが上がると言った感じらしい。

それらの上がり方や、何でそれで上がるのかは詳しい事は何も解っていないがそう言う物と言う事で皆納得しているらしい。

そして、隠されたステータスにはHPと言われる生命力とMPと言われる精神力もある。

レベルが上がればその二つのステータスは大幅に上がるらしい。

俺はそれを聞いて余りの事に理解が追いつかなかった。

いや、理解が追いつかないと言うよりもこんなのありなのか？

と言った思いが胸中で渦巻いていた。

その思いを吐き出すように思いつきり突っ込みを入れてやりたかったが、此処でそれをやればただの変人だろう。

俺は必死に我慢した。

「まんまRPGのゲームじゃないか！」

と叫ぶ事を。

RPG、ロールプレイングゲームでよく使われるそのまんまのステータスにこのリアルさ、最近では当たり前になったVRPGそのものでしかないのだ。

リアリティを求め続け、そう言う感じになっただけが俺はやっ

た事が無いので話してしか知らない。

だが、聞いた話しと今の現状に違いが余りないのだ。

数少ない違いと言えば、俺は今此処で生きており、普通であれば出来るログアウトと言う物が出来ないくらいだろう。

損なような話を聞き続けた俺は、そのレベルの話を全部聞き終えた頃には疲れ果てていた。

精神敵にだ。

一通り自分の中での葛藤と戦い、ある程度落ち着いてから俺自身のステータスはどんな感じなんだろうと思いついて見るのかを聞いてみた。

見るのは簡単らしく、自分のステータスを見たいと思い浮かべれば良いと言う。

試しに見ようと試みるが一向にそんなステータスのウィンドウが出てこない。

何度か試したがどうしても出てこなかった。

「俺にはステータスを見る力が無いのか」

そんな事を呟きながら落ち込むと、レースが少し考え込みながら「もしかして」と呟いた。

俺はそんなレースを見詰め、言葉の続きを待つ。

「登録作業をしていないんじゃないかしら？」

登録って言う物が何か解らない俺はレースから説明を受ける。
話を聞いたところ、この世界には何処のどんな街にでも必ずギル

ドと言う物があり、産まれた時に其処で必ず登録作業を行うと言う事だ。

ただ時々様々な理由で登録作業をしない、出来ていない人もいるらしい。

そんな時は気づいたときにギルドに行き、登録作業をすればいいらしいので其処まで困る事でもないと言っていた。

勿論異世界だと思われる所から来た俺が登録作業等している訳が無い。

だからその説明を聞いて「成程」と直ぐに納得が出来た。

だが俺がレースに異世界から来たから登録していない、等と言えるわけもなく困っていると、何かに思い至ったらしいレースは、悲しそくに俺を見詰めた。

「うん、時々、本当に時々だけど登録して無い人もいるよね、ごめんなさい」

正直何故此処まで悲しそくに、その上謝られているか解らない。だが、何かしらその登録できない理由によってだと言うのだけは解る。

酷く悲しそうで切なそうなレースの表情等見ていられず、直ぐに否定したかったのだが理由が解らないのに直ぐに否定をする事が出来なかった。

むやみやたらに否定したりすれば可笑しく思われるだろう。

一応俺は言葉を話せる様になってからおれ自身の事を説明してある。

勿論異世界、ここから違う世界から来た等と言った訳ではない。

自分でも良く解らないが、地球と言う日本という場所に居て、気づいた時にはあの草原に居たと。

そのいた場所と此処では言葉も文字も違った為、話したりが全く出来なかったという説明をしておいた。

レイスは地球や日本という場所を全く知らなかったが、レイス自身がこの村やこの大陸の町等の名前は知っていても、ほかの大陸の地名等を殆ど知らなかったのでそう言う場所があるんだと言って納得してくれた。

それだけでも怪しく、可笑しく思われても可笑しくない。

だからこそ、これ以上変な事を言って可笑しく思われるのは問題があるだろう。

幸い村の人達は皆良い人で俺の話を素直に信じてくれている。

けど此の話、ギルドの話はそう言う場所に居たからでは説明できない。

レイスははっきりとこの世界全部のどの町や村でもそうなのだと言っただけだ。

この大陸以外の地名等は知らないと言うのに、どんな村や町にでも絶対にそのギルドがあるとと言う事だけは間違いないと言うからだ。どうしてかは解らないが、此処まで断言されている以上は無理だろう。

だからこそ俺は曖昧に「気にして無いから気にしないで欲しい」とその場を濁した。

俺に色々親切にしてくれる村の人達を、レイスを騙しているのが凄く心苦しい。

それでもそれしか方法が解らないのだから情けない限りだ。

このままこの話をしていると辛い、だからこそ少し強引にだが話を逸らす事にした。

話をずらし、建物の名前や動物の名前、植物の名前等を色々聞いたりした。

その結果、違う名前の物も結構あるのだが、その違うもの以上に同じ名前の物が多すぎる。。

少し詳しくその同じ物について聞いてみたが、やはり形や意味も

同じなので間違いないだろう。

例えば家。

家はこの世界でも家と呼び、俺が貰った絵本もそのまま絵本と呼ぶらしい。

そして俺が絵本を貰った建物をやはり教会と呼び、神を奉り、祈りを奉げる場所だと言う。

モンスターの事を聞いた時にもそれと解る例え方をレイスが良くしていた。

因みにモンスターの名前も俺の居た世界のゲームに良く出てくるモンスターと同じ名前のモンスターが多かった。

「狼みたいな素早いモンスターや、ゴリラみたいなすつごく大きな怖いモンスターもいれば、ウサギみたいなすつごくかわいいモンスターまで色々いるのよ」

と言った感じに動物の呼び名を例えに出している。

その動物の事を聞いてみたがやはり狼は俺のいた世界の狼と同じ様な形らしいし、ゴリラもウサギもそのまんまだ。

実際見てみないと解らない事だが、話を聞く限り違う所が見当たらない。

話を聞けば聞く程、先程考えたとおりRPGのゲームの中なんじゃないかと言う思いが浮かんでくる。

重なる点や似ている点が多すぎるからだ。

俺は暫くの間、ずっとその事を悩み続けていたが、直ぐにその考えがどうでも良いんじゃないかと思うようになった。

何故か。

実際此処が本当にゲームの中の世界であろうが無かるうが、こうして今此処で生きている俺にとってはこの世界は本物で、このまま

此処で生きて行くのに変わりはないと気づいたからだ。

それに気付いてから俺はその事を余り考え無い事にした。

実際余り考えなければ対して気にもならず、知らない生活の日々に悪戦苦闘しながらも楽しく毎日を過ごす事が出来た。

こうして俺は、此処が今までいた世界とは全く違う世界だと理解させられたのだった。

第三話〜悲しい現実〜（前書き）

第三話です。

毎日更新、というわけには行きませんが、出来る限り更新していきたいと思っています。

読み返してみたり、色々と変更してみたりしているので、多少時間が掛かったりしますが、最後まで頑張りますのでお願いします。

第三話　悲しい現実

【悲しい現実】

レイスからステータスが確認できない可能性として登録を済ましてないからでは？

と言う事を聞いてから数日。

カランカランという扉を開けた時の鈴の音と共にギルドと呼ばれる建物に入った。

何故すぐに来なかったのかというと、実はステータスが見れなかったら切ないなあと、少し考えてしまっていたからだ。

それも結局は、心配そうに気にかけてくれるレイスや村人の視線が痛くてとうとう行かなくてはいけない状態になってしまった。

ギルドは入ってみると意外とこじんまりとしている内装だった。後々に聞いた話だが、この村のギルドは他の街や村のギルドよりかなり小さいらしい。

実際レイスの家よりも一回り小さな建物だった事から、恐らく事実なのだろう。

ギルドの広さは大体畳十五畳位かな？

カウンターがあり、その前には五つ程の椅子。

他は五人位座れるそんな小さな丸テーブルが二つ置いてあるだけだ。

それだけだと言うのにギルドの中は狭く感じられる。
丸テーブルに村人が何人か座っているせいだろう。

「おう！ お前さんは、身体の調子は良いようだな良かった良かった！ 何事も身体が資本だから無理しないように気を付けろよ。それで、今日は一体どうしたんだ？」

俺がそんな事を考えているとギルドの親父、クオーツさんがそう言って笑いながら俺に話かけて来る。

先ず最初に心配してくれていて、すっかり元気になっている俺を見て本当に良かったと言った感じで嬉しそうに笑ってくれた。

本当に良い人ばかりだこの村は。

心の中がほんわかと温かくなる。

何故ギルドの親父であるクオーツさんが俺の事を知っているかと言つと、俺が目覚めた時家に来てくれていたからだ。

と言うよりも、俺が目覚めた時、村の人達は殆ど来てくれていた上に、その後これなかった人も結局宴会騒ぎが起こった頃には全員来ていたので、その時に全員と自己紹介をしあっていたのだ。

何せこの村は小さい。

とても小さな村であり、一時間もあれば村の中を全部回りきれほどの小ささだ。

そんな小さな村なのだ、今では俺の事を知らない村の人は誰一人いない。

小さな子供から年老いた老人まで全て俺の事を知っている。

勿論名前までも。

気に恐ろしきは村の小ささと地域一体型の協力関係よ。

それだけ村人全員が仲が良いと言う事なんだろうな。

勿論俺も村の人達の名前は全員覚えてる。

少しそんな事を考えているとクオーツさんが「どうした？ 未だ体調悪いのか？」と聞いてきたので「いえ少し考え事をしてたんです、すいません」と答えて謝った。

「あーむず痒くなるからそんな丁寧な言葉遣いしなくて良い！
と言うか辞めてくれ！」

とむず痒そうに、頭をかきながらクオーツさんが言ったので、少しおどとした感じだったのが為口で話すようになった。

それからどうして此処に来たのかを話していく。

レイスに「もしかして登録をしていないんじゃない？」と言われたのでその確認に来たと言う事を。

やはりそう説明するとクオーツさんも少し表情を暗くして「人生はこれからなんだ元気出せよ」と言っただけで俺を慰めてくれた。

どう言っただけで誤解をされているんだろうか。

気になる事だが、無駄に藪をつつけないので曖昧に返事を濁す。

申し訳なさがだんだんと胸を締め付ける。

話せないって言うだけで意外ときついもんなんだと改めて思った。そんな事を考えている内にクオーツさんは書類を持ってきて丁寧に俺に登録作業の仕方を説明してくれる。

「そつだ、先ず其処に名前を書いてくれ。ん？ 変わった名前だな、まあ良いか、次に……いや、取り合えず名前だけで良い」

次の項目を見ると生年月日と年齢であり、その次が産まれた場所だった。

その書類を見てから気付いたが、俺はこの世界の年号を知らない。つまり書きようが無かったのだが、クオーツさんのその誤解による気遣いのおかげで助かった。

多分項目を見て気付いた瞬間やバイと思って緊張したのを見られたのだろう、直ぐにそう言ってくれたのだ。

やっぱりそうなのかと言う思いが浮かんでくる。

誤解されている内容だ。

何となく回りから色々言われている内にそうなんじゃないかと言う事は思い浮かんでいた。

先ず初めに登録されていない子、つまりこの表現から子供が時々いると言う事。

大概この話を聞いた村人達が「大変だったろう」「辛かっただろう」と顔を顰めながら慰めてくれた事。

それに追加して「本当に親として最低だ、あり得ない！」等と怒る人達がいた事。

今のクオーツさんのように「頑張れよ」「挫けるなよ」「これから良い事が沢山ある筈だ」と応援してくれる人達がいた事。

そんな様々な内容から少しずつ予想を立てていた。

はあ、やっぱりそうなのか？

扱いや雰囲気から恐らく俺は村人達に『産まれた瞬間登録作業すらせずに捨てられ、一人で生きてきた』と思われているのだろう。

しっかりと答えを聞いてみたい所だが尋ねる訳にもいかなないので悶々としたものが溜まっていく。

自業自得だからこればかりは我慢するしかない。

そんな事を考えながらも登録作業は進んで行った。

登録作業と言っても、俺がやったのは最初の名前を書く事だけであり、他は全て説明だった。

説明によるとレイスが言った通り、登録作業が終わった後は好き

な時にいつでもステータスを見る事が出来るようになるらしい。

説明を聞いている内に職業の事について聞いた瞬間思わずポカーンとしてしまった。

何せ登録して最初の状態は基本的に無職となっているらしいからだ。

無職って何だその職業！

とか突っ込みたくなったが、クオーツさんに突っ込んでも仕方ないだろう。

深呼吸をしながら我慢我慢と自分に言い聞かせて落ち着かせる。

ちなみにその無職と言うのは、登録した始め、赤ん坊の頃の話であり、五歳くらいになると大体が村人であったり、商人であったりと自動で商業が切り替わるらしい。

今の時代だと、ある程度成長した後は冒険者になる者が多いらしい。

説明は続きステータスの話になった。

初期ステータスは基本的に人によって様々らしい。

最初のステータスは基本的に平均五位だと言う、産まれたての赤ん坊がそれくらいと言う事だ。

その時クオーツさんが苦笑しながら「俺も実際そんな奴等を見た事ねえけどな」と言う前置きと共に世界には最初から初期ステータスが平均で十とか二十の奴もいると言う。

何だその反則気味のステータスはと思わず俺まで思ったよ。

溜息をつきながら先ず間違いなく俺には関係ない事だろうな。

そしてこの登録を行うと、死んでしまっても自動的にその死亡通知がギルドに来るらしい。

どう言う理屈かは解っていないが、神様の御業と言う事らしい。

そしてその説明の中に、心底驚く事にあり得ないと思わず突っ込んでしまった程の事があった。

何かと言うと、それは死んでしまっても、殆どの場合蘇生が出来ると言う事だ。

思わず笑っちゃった。

「何だそれ」

と突っ込んでしまった俺の驚き様に逆にクオーツさんが驚いていた。

クオーツさんが「そんな事も知らなかったのか」と言いながら同情的な視線を投げかけてくる。

これもこの世界だと常識だったのか。

少し心苦しい物があつたが、変に不審に思われたりしなくて良かったと思つた。

その事について詳しく聞いてみると、どうやら普通に死んでしまった場合はほぼ間違いなく蘇生が出来るらしい。

ならばどういふ場合は蘇生が出来ないのか。

それを聞くとどうやら対人戦、それも普通の対人との戦闘等ではなく特殊な人達同士の戦いの時、稀にそう言う事が起こるらしい。

一度だけクオーツさんも見た事があるらしい。

その時は光り輝く鎧に身を包んだ、真っ白な羽の生えた天使のような人が現れてその人を連れて行つたらしい。

それから数時間、又は数日の後に遺体だけが戻つて来たと言う。

その戻つてきた遺体はどんなに蘇生させようとしても成功しなかったと言う事だ。

一通りの話を聞いて俺は益々本当にゲームの世界みたいだと思つた。

レベルやステータス、拳句の果てには死んでも蘇る。

そして今の話だ、光り輝く鎧に天使の羽の人が連れて行く、もしかしてそいつはオンラインゲームでは絶対の存在であるGM（ゲームマスター）なのではないかと。

そしてそれがGMならば連れ去られた人は恐らく違反者だ。

その結果違反者のアカウント停止、もしくはキャラクター削除でこの世界での理屈にあてはめる為に遺体だけを戻し死んだ事にしたんじゃないのか？

そんな事を考えているとクオーツさんがついつと顎を差し出してテーブルで話している三人組の方を指した。

「丁度其処のテーブルにいる冒険者達もな恐らく特殊な奴等だ。産まれた瞬間は知らないがレベルが低い頃からそこいらの奴等より全然強い上に、レベルが一気に上がったariするので成長速度も半端ない位凄い。普通の人なら絶対にあり得ない事だからこそあいつらは特殊な人間と呼ばれている。きつとお前さんはその事も知らなかったんだろう？」

クオーツさんの言葉に頷きながらやっぱりゲームじゃないのかこれとは考えた。

オンラインゲームなら最初の成長が早いのは結構多い。

レベルも10や20位までならサクツと上がる物が大半だろう。

その時、決定的とも思えるような話がその冒険者達から聞こえてきた。

何と言うか、余りにもタイミングが良いが、俺にとっては良い事なので考えないようにしよう。

「にしてもよお、この間の対人戦の時のあの“プレイヤー”滅茶苦茶腹立つよな！」

「全くだね！ 人さまが一生懸命集めたアイテムかつさらってい

きやがったんだからな！ スキルでそういうのがなければ”GM”に報告して“アカバン”してもらうのによ！」

「ってかさ、何で”運営”側もんなスキル作っちゃったんだ？ やってらんねえよ。俺本気でこの”キャラ”消して、その系統のスキルを取るキャラに”作り直そう”かと思っただくらいだぜ？」

あっはっはっはっは……。

思わず乾いた笑いしか漏れなかった。

幾ら変な乾いた笑い声をあげて現実逃避をしたところで聞いた内容が変わる訳じゃない。

って言う事はだ、まず間違いなくこの世界はゲームの中の世界だろう。

それもオンラインゲームの。

俺にとっちゃそれでもただの異世界と余り変わらないんだが、それでもゲームの世界だと知ってしまうとなんだか、どう表現して良いか解らないが溜息が漏れる。

それでもまあ、死んでしまっただけでそれっきりって言う可能性が無くなった事だけはゲーム特有のその世界観に感謝だな。

それにしても、やっぱり俺にとって異世界であろうとゲームの中であろうと、ただ此処で生きていると言う事に変わりはないのにとっしても溜息が漏れる。

それから少しの間クオーツさんと話をして、色々と教えてくれた事に礼を言ってから、ギルドを後にした。

それじゃあとうとうステータスの確認の時だ。

ドキドキしながらクオーツさんに説明された通り頭の中でステータス表示と考えた。

すると目の前にステータスウィンドウが現れる。
思わずホッとした。

出ないんじゃないかと少し思っていたからだ。
だがそのホットした感覚も長く続かなかった。

なぜならば、そのウィンドウに刻まれた数字のせいだ。

もう、何て言って良いか解らない程、凄まじい数字の羅列が並んでいた。

赤ん坊から十三歳位までの間は基本的にステータスの変動が殆ど無いらしいがそれでも最低平均で五位はあるとクオーツさんが言っていた。

そう最低でもだ。

確かに俺は産まれてこの方が特殊な物を習った事も無ければスポーツ等も特にした覚えが無い。

そんな中で俺が自慢できると言ったら記憶力の良さと適応力の高さくらいだろう。

だからといって、だからと言ってこれは無いんじゃないか？

がつくりと膝を地面に落としながらそのステータスを見詰める。

其処に書かれているステータスウィンドにはこんな数字が並んでいた。

名 前：岩崎 雅樹

職 業：無職

レベル：1

STR：2

VIT：2

AGI：3

DEX：1

何これ、あり得ないほどの低ステータス。

産まれたての赤ん坊以下のステータスってどういう事だよ。

泣いても良いよね？

と言うより既にもう泣いてるんだがな。

INTだけまともだが、他のこのステータスの低さはあり得ないだろう。

いや本気で、冗談抜きで。

ああ、人々は優しくても世界は俺に厳しかった。

一人落ち込み、黄昏ていると一人の村の人が通ったので、一縷の望みを掛けてステータスって俺ぐらいだと普通どれ位ある物なのかを聞いてみた。

本当にそれこそ藁にも縋るような思いだったよ。

だが帰ってきた答えは俺を完璧に絶望に突き落とす物だった。

「ん」普通あんたくらいの年なら大体平均ステータス8前後じゃないかい？ 最低でも6位はあると思うよ。 特別苦手なものがあるんなら5とかもあるかもしれないけどね」

俺はとりあえずその村人に礼を言々と物陰になっているところまでふらふらと歩いて、其処でまた膝を落とした。

散々落ち込んだが手を付いて愕然としている今の姿は悲壮感が漂

っている事だろう。

いや、冗談じゃ無く本気でね、それも実は本当に泣いてるから。ある程度泣いた後ふらふらとした足並みでレイスの家まで帰った。げっそりと疲れた様な表情に真つ赤な目、それを見てレイスは酷く驚いたように俺に詰め寄って来た。

「い、一体どうしたの!？」

俺はこの時もうすでに自棄になっていた。

聞かれたのでギルドを出てからの事をそのまんま話た。

ついでに笑いながら「ほら」と言って見せたステータスウィンドウを見てレイスはまさかと言った表情で気まずそうにしていた。

後でその時の事を聞くと、笑っていた筈なのに全然笑ってる感じじゃ無く、何処か無機物のゴーレム見たいだったと言われた。

変な笑い声を上げる俺にあたふたと困惑していたレイスは、突然大声を上げて、家を出て行った。

「き、今日は! ご、ごちそうにしよう! うん、そうしよう! 偶には美味しいもの食べて心の栄養つけなきゃね!」

そうしてそそくさと逃げるように家を出て行ったのだ。

その後大量の食べ物と酒を持ってレイスが帰って来たと思ったらそれに続いて村の人達も何人か一緒にいついてきていた。

その中にはクォーツさんもいて「悪い事は飲んで忘れちまえ!」と言う事で無理やり酒を飲まされ、なし崩しのどんちゃん騒ぎになった。

皆の気遣いと酒の力もあってその後は俺も元氣を取り戻して騒いでいた。

そして次の日も全く落ち込むと言った事はしなかった。と言うよりも出来なかつただけなんだけどな、二日酔いで。それから一週間、もう普通に元氣良く動いている俺がいた。

あれからゆつくりと考えると実際ステータスが低いからと言って困る事が何もない事に気がついた。

それに村の手伝いとか、自分自身で鍛えればそれだけステータスは上がっていくと言う事も聞いて、これから頑張れば何とかなると解ったからでもある。

だからこそ、数少ない特技の環境への適応力の高さを生かして毎日を楽しく過ごしている。

俺は意外とタフなのかも知れないと自分で少し思った。

第四話〈信頼と剣〉（前書き）

少し長くなりすぎたので、以前の四話を二分割にする事にしました。少しでも読んでいただけるように、もっと頑張らせていただきますので、是非よろしくお願いします。

第四話　信頼と剣

【信頼と剣】

余りのも余りな低すぎる俺自身のステータスを知ってから、早い事で十年程が経った。

現実派余りにも残酷ながら、挽回が出来ると解ったので、日々色々と努力しながら充実した日々を送っていた。

毎日の筋トレ、村の周りのランニング、村の人達の手伝いで薪割りから裁縫、畑仕事から料理に関してまで色々やり、簡単な大工仕事や荷物の運搬等までやってきた。

今までやった事の無いそれらの仕事は中々に最初は上手くいかなかったが、毎日毎日繰り返しやり続けているとその内問題なく出来る様になり、それから更に時間が経った時にはかなり余裕を持って出来る様にまでなった。

今まで出来なかったのが出来る様になる、頑張れば頑張るだけ身になり、周りの人達にまで感謝をされる。

楽しかった。

そう、非常に楽しく、充実していた。

そんな日々を過ごしていながら、やはり時々、というよりも一年

に一度の割合で訪れる冒険者達の話によつてますます此処がゲームの世界で、俺達中の人達と、冒険者達、特殊な人達はかなり違う物だと言う事が多々解った。

例えば年に関してだ。

特殊な人達、冒険者達は基本的に外見も髪型も殆ど変わる事が無く、年も取らない。

それはゲームの中の設定上仕方の無い事なのだろう。

だが、勝手に言うだけであり、専用のアイテム等を使えば見た目も年齢も設定しなおしたり出来るらしい。

一年に一度訪れ、酒場で愚痴を零している冒険者達の話なので、本当の事は解らないが、実際ゲームの中であれば出来ても可笑しくは無いだろう。

それが中の人達、俺達の場合は基本的に年は一切取らない。

年は取らないが、結婚や子供等は問題なく作る事が出来るのだ。

やり方も俺が知っているのと同じ様に、愛し合つて愛を紡ぐ事だ。

そして新しく産まれた子供は成長する。

此処が基本的にはと言つた理由だ。

子供は一定の年齢まで成長するとそこで成長が止まり、それ以降は年をとらなくなる。

恐らく、一人一人に限界の年齢値というのが設定されているせいなのだろう。

良くは解らない事なのだが。

そういつた事が不思議だったり、恐怖を感じたりはしないのかと村の人達に尋ねた事もある。

その答えはこの世界に神様が居て、神様の御加護だから当たり前で不思議じゃないし、怖いと思つた事も無いと言う。

逆に何でそんな事を思うのかと俺が心配されてしまった。

精神的に落ち込んでいるんじゃないかとだ。

心配されたのを利用した様で心苦しかったが、その時の俺は直ぐ

にその事実を受け入れる事が出来ず、一週間程悩み続けた。

その間色々村の人達は俺に気を使って色々としてくれて、益々皆の事が好きになったのは一先ず置いておこう。

とにかく悩み続け、その結果いくら悩んでも現実是不変変わらないのだからしょうがないと言う事だった。

実際問題こうして此処で生きていく以上なるようにしかならないだろう。

そう言う結論が出て、俺も何とか元気になると、今度は年を取らないのだから気長に色々頑張ろうと思えるようになった。

そして、今まで村の中の手伝いは個人的に頼まれての手伝いが殆どだったが、ある程度仕事が出来た様になったので、今度からギルドで仕事の手続きをして、それをこなせば多くは無いが金が入ると教えて貰い、ギルドで仕事を請け負うようになった。

その為、俺はギルドに頻繁に顔を出す様になった。

それだけ頻繁にギルドに顔を出していると、当たり前前事だがクオーツさん、呼び捨てで呼ばれる様に言われたのでクオーツと呼び捨てで呼ぶが、クオーツともかなり仲が良くなった。

仕事が終わる報告を済ませると良く酒と肴で小さな飲み会みたいな物を開いたりする程に。

ギルドに頻繁に訪れているお陰で、今までは何度か見逃した事もある、冒険者達を毎年間違いない見かけようになった。

冒険者達は毎年決まった日に訪れ、その一日で帰って行く。

その冒険者達によつて、また新しい事実が明らかになった。

と言つても、正直余り意味の無い情報だったのだが。

どう言う情報かと言うと、簡単に言えば外の世界とこの世界の時間の流れについてだ。

「先週の対人戦もそうだったけどよ、今週もまたあのプレイヤ―にやられたぜ！ 本気であいつどうにかしてやりたい！」

「同感だね！ 人さまのアイテムだけでもむかつてしようがないってのに、拳句の果てに装備品まで破壊していくってどういうことなんだよ！ 滅茶苦茶腹立つ！」

「ってかさ、たった一週間で何であんなにスキルレベル上がったんだよ、おかしくね？ チートか？」

「チートと思いたいけどよ、色々言った後に何だが、あれくらいなら少しコアな廃人ならあんなもんだろう？ 実際一週間とはいえこの中じゃ一年なんだからさ」

「ああ廃人かあ、やつぱりそうだな。そうじゃなきゃ納得できねえよ。 いやいや、廃人でも納得できない強さだけだな！ ム力つくけど今度からあいつにかかわらないようにしようぜ」

「そうだな、もうやめるか。 普通にあんな廃人に関わらないで、違う奴等と戦うか。 あの廃人は家の廃人連中にお相手願えば良いんだしな」

「だな。 よっし！ じゃあ次の対人こそ活躍しようぜ！」

「おうよ！ 頑張ろうぜ！」

と言う話だったのだ。

この話しの中で出た様に、外の世界での一週間がこの世界では一年。

毎年来ると思っていたのは、毎週ある対人戦の為だった訳だ。それなら同じ日に来るのも当たり前だ。

外の世界と差があるから、その修正で冒険者達は強くなりやすいのだろう。

そうじゃなくとも、基本的にモンスターを倒すだけで比較的ステータスは爆発的に上がりやすくなると言うのもあるのにな。

因みに、この世界で一年は七ヶ月。

一ヶ月、二十四日。

簡単に計算が出来る様になっているが、外の世界の一時間がこの世界の一日で、外の世界の一日がこの世界の一ヶ月に当たるのだろう。

この話を聞いたのは、俺がステータスを見れるようになってから三年程経ってからだった。

その後も、色々似たような話を毎年聞いたり出来たので、俺達と冒険者達の違いと言うのがはつきりと解った訳だ。

それにしても、モンスターとの戦闘は本当にステータスが爆発的に上がる。

俺も一度だけモンスターと戦った事がある。

勿論、命がけだった。

むしろ死ななかった事が不思議でしようがない位だ。

何とか倒した時には、俺は既に自力で立ち上がる事も出来ず、あのまま後しばらく放置されていれば死んでいただろう。

その後直ぐにレイス達が来てくれて、傷の手当等をしてくれたので、何とか一ヶ月程のベッドの上での生活で回復出来たのだ。

その時の結果によってステータスが爆発的に上がると言う事が解ったのだ。

俺がそのモンスター、鼠を馬鹿みたいにでかくしたモンスターでラットと言っらしい奴と戦ったのはステータスを見れるようになってから六年程経ってからだ。

そのモンスター、ラットは俺が村の入り口付近で畑仕事をしている時にかなり遠くから村の方に走って来るのが見えたのだ。

この時には既にもうこの村が俺の村であり、村の人達は皆大好き

な人達だった。

だからこそ、モンスターが村の中に入ってくるのを黙って見過ごす訳には行かなかったのだ。

震える手足を無理やり言い聞かせながら、手に持っていた農作業用の桑を構える。

近づいてきたラットは見た目かなり大きめの鼠、と言っても大体五十センチ程の大きさだった。

最初見た時、それほど強そうに見えなかったのだが、桑を思いつきり叩きつけようとして避けられると同時に体当たりを喰らった瞬間その考えが吹き飛んだ。

一発の体当たりで血を吐き、眩暈が酷い。

足はふらつき、起き上がる事すら大変だった。

だが、このまま倒れていても殺される、村の人達が危ない、そう思い何とか立ち上がる。

一瞬でも強くないかもと思い油断した俺に後悔しながら、改めて桑を構えてラットに向き直る。

ラットは体当たりした反動で俺が起き上がり、桑を構えるまで此方に再度攻撃を仕掛けてくる事はしなかった。

またラットが走って体当たりをしようとしてくる。

よく見れば避けられない事も無い。

俺は何とか横に転がりながらその体当たりを避ける。

直ぐに起き上がり、姿勢を立て直していないラットに今度こそと思いつき桑を叩きつける。

ザクつと突き刺さる桑、だがラットはそれでも倒れる事無く暴れ、俺はまた吹き飛ばされる。

だが先程と違い真正面から体当たりを喰らった訳ではないので、ぎしぎしと言う身体を無理やり起こし、また桑を構えた。

その後三回ほど同じ様な事を繰り返し、四度目の桑をラットに突き刺すと、ラットは小さな悲鳴を上げながら倒れたのだ。

それまで散々吹き飛ばされたり、体当たり以外にその牙で噛み付

いてこようとしたときに掠ったりで、身体のあちこちから出血が酷く、全身打ち身と所々骨折すらしている所もある程だった。

その後、治療をされながら何故あんな無茶をしたのかと村の人達からかなり怒られた。

俺が恥ずかしがりながらも、その理由を話すと、村の人達は一瞬驚いた表情を浮かべた後、また怒り出した。

でも、最後に凄く感謝をしてくれた。

村を守ろうとしてくれてありがとう。

きちんと話を聞くと、モンスターは村の中に入れないようになってるらしい。

聴いた瞬間かなり無駄な事をしただけだったのかと落ち込んだが、最後のその言葉で凄く報われた気持ちになった。

これなら命を掛けた甲斐があったと言える程に。

そのお陰で、今まで以上に村の人達と俺の関係は良くなった。

今までだって良かったのが、それ以上に良くなったのだ。

そしてそのモンスターと戦った結果のステータスはこんな感じだった。

名前：岩崎 雅樹

職業：無職

レベル：1

STR：2 . 2

VIT：2 . 3

AGI：3

DEX：1 . 2

INT：8

と言う数値から、一気に上がりこうなったのだ。

名	前	岩崎	雅樹
職業	無職		
レベル	1		
STR	2	8	
VIT	3		
AGI	3	2	
DEX	1	5	
INT	8		

命がけで戦っただけはあると言える程上がったのだ。
ステータスを確認した俺は一瞬呆然としながらも、次の瞬間大声を上げて喜んだ。

その声を聞いてレイスが何事かと俺の部屋に訪れたので、その理由を話すと、レイスもわが事のように喜んでくれた。

でもこれからは無茶をしないようにと一言注意をされたけど。

その後レイスからクオーツへ、クオーツとレイスから村の皆へと話が伝わり、宴会が始まった。

この村は誰かの祝い事や悲しい事等があつた時基本的に全員で集まつて騒ぐのだ。

今回もまた、俺の為に、俺を祝う為だけに皆が集まってくれた。物凄く嬉しく、楽しかった。

大いに盛り上がり、騒ぎ散らしたものだ。

案の定、次の日は二日酔いで寝込んだのだが、それもまた良い思い出だ。

大いに喜んだのは良かったが、これ以降、モンスターと戦おうとは一切思わず、実際問題戦つたりしなかった。

ステータス上がるのは嬉しかったが、それ以上に死にたくないし、危険な目になんて会いたくないからだ。

それでも、と。

もしまた何かあつた時のために剣を習う事にした。

幸いな事に、多少の剣くらいならクオーツが扱えたので教えてもらえた。

ある程度基礎を教えてもらつた後は自分で試行錯誤しながらの訓練だった。

まあ数年程度では多少ぶれる事無く真つ直ぐに剣を振れるようになった程度にしか成長者はしていないのだが、それでも長い時間があるのだ頑張ろうと思つた。

こうして、俺は自分を、そして自分以上に村の人達をいざと言う時少しでも守れるように仕事以外も頑張るようになったのだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6851v/>

異世界混沌平凡譚

2011年8月16日00時15分発行